シリーズ「子どもの野生復帰大作戦」⑦

子どもの遊びと自然環境㊦

地域ぐるみで自然体験活動を推進する「子どもの野生復帰大作戦」は、現在「自然体験学校」や「推進フォーラム」などの取組みを行っています。

このコーナーでは、自然体験活動などを多方面で実践されている方々からその必要性や意義を伺い、連載で紹介しています。

【生涯学習課】

NPO法人コウノトリ市民研究所代表
（県立豊岡総合高校教諭）
上田　尚志さん

（前回からの続き）

もちろん昔に返れというのではありません。しかし、時代が変わっても子どもたちが地域で群れて、集団として遊ぶという体験はさまざまな意味で人間の発達にとって必要なことです。自然と関わって遊ぶことがすべてではありませんが、自然は子どもたちの発達にとって重要です。

遊園地に行くのが定番だった地域の子ども会の行事で、自然遊びをするところが増えてきました。私もいくつかお手伝いをさせてもらいましたが、子どもたちは楽しそうですし、大人も結構楽しめます。

私たちはコウノトリ市民研究所で「田んぼの学校」という行事を5年間やってきました。今年、市の「子どもの野生復帰大作戦」も始まりました。今後は、それぞれの校区や地域の日常の中で子どもたちの野生復帰を考えることが必要だと思います。そのためにさまざまな工夫や協力が必要です。私たちは地域に安全に遊ぶことができる水辺を造ることができないかと「春の小川作戦」を考えています。休耕田や水路、里山を利用しての「田んぼの学校」も地域で工夫すればできそうです。

また、市民研究所では豊岡盆地の自然を知るために、生きもの地図作りを進めてきました。メダカやホタル、タンポポ、ヒガンバナ、ゲンゴロウなど身近な生きものの分布地図を作るのです。初めて見つけると、とてもうれしいし、自然をくまなく見て回ることができます。それらはポスターや冊子にまとめたり、コウノトリ文化館に展示したりしています。子どもたちで校区の生きもの地図作りをするのはどうでしょう。そして、できれば小学校などに「博物館」を作るのです。空き教室に子どもたちの集めてきた石ころや押し花、いろいろな生きものを並べたり、飼育したりするのです。市内の小学校には、必ず図書館と同じように博物館があるなんていうのは楽しいと思うのですがどうでしょう。もちろん、そこには生きものにちょっと詳しい先生がいてほしいですけどね。

▲ビオトープ水田で遊ぶ子どもたち（コウノトリの郷公園）

小学生5,300人が大クリーン作戦

9月21日から22日にかけて、市内全小学校による「校区内クリーン作戦」が展開されました。

この取組みは、のじぎく兵庫国体に参加する多くの選手や監督など、全国から訪れる方々を温かく、気持ちよくもてなそうと実施したものです。

各校区ごとに、バス停を掃除したり、空き缶等のゴミ拾い、草取りなどに汗を流しました。

この活動を通して、国体選手を心から歓迎する機運が高まりました。

▲みんなで協力して隅々まで（竹野川）

▲駅の通路も感謝の気持ちを込めて（JR豊岡駅）

▲バス停もピカピカになりました（合橋小学校前バス停）

▲会場周辺は特にきれいにしました（植村直己記念スポーツ公園）